ご当地シャルソン協会・ウルトラシャルソン実行委員会

はじめに

「３年」を過ぎたからこそ始めた“ポジティブな復興支援”としてのウルトラシャルソン。年２回の開催で東日本大震災による津波被災地沿岸を少しずつ南下。第５回目の開催時には「５年」が過ぎていました。釜石から南下を始め、４回で435kmを走破。前回やっと東北の玄関口である仙台に到達。第５回はその仙台からスタートしました。

福島のルートを決める際、さまざまなことを考えました。津波の被災地をずっと巡って来ましたのでほとんどが沿岸部を走って来ました。福島に入り、どの道を通るのか。

結論から言うと、ここで大きく内陸に入ることにしました。立ち寄る地点を考慮するとどうしても長距離になるため、初めてのオーバーナイトステージを敢行。「闇の中」を走りました。

ゴールに選んだのは、郡山市。震災と原発で、自分や知人がさまざまな変化を経験した方の多い土地。郡山のまちおこしとしての「郡山シャルソン」とゴールを共有する初めての「Ｗ（ダブル）シャルソン」となりました。

「もう5年前だしな」という声を多く聞きました。過去４回との大きな違いでした。「復興」したかどうかは程度の差がありますが、「生活」を立て直しているのは確かです。とてつも長い被災地の距離を順番に走って来ましたが、「次」来るときは様子はまた一変していると思います。

第６回は今回のゴール地点・郡山から、いわきまでとします。今回の変化を見て、南下は一旦そこまでとすることにしました。第７回・第８回は釜石から青森の北端あたりまでを、北からか南から走ると思います。

ウルトラシャルソン実行委員長・佐谷恭

⇒シャルソン（ソーシャルマラソン）とは？
走ることを通じてまちを再発見し、人と人とがつながるランニングイベント。2012年2月に経堂マラソンとしてスタート。以後４年で全国で100回超開催され、まちおこしに活用されている。

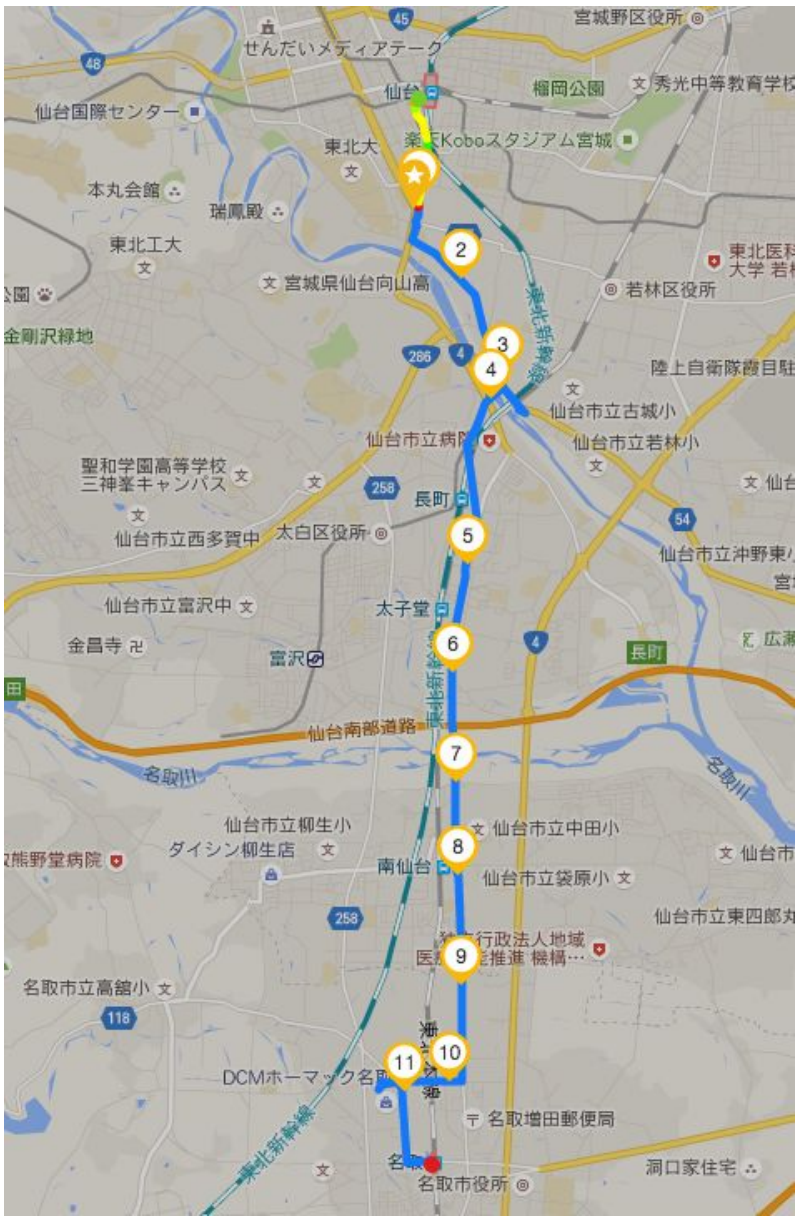
⇒ウルトラシャルソンとは？
シャルソンの仕組みを使った東北応援プロジェクト。
８時間走って、８時間飲んで、８時間寝る。その過程で被災地を見て、地元の方とお話し、被災地で活動してきた方の話を聞いていきます。

実施スケジュール、ルートと参加人数

第５回ウルトラシャルソン

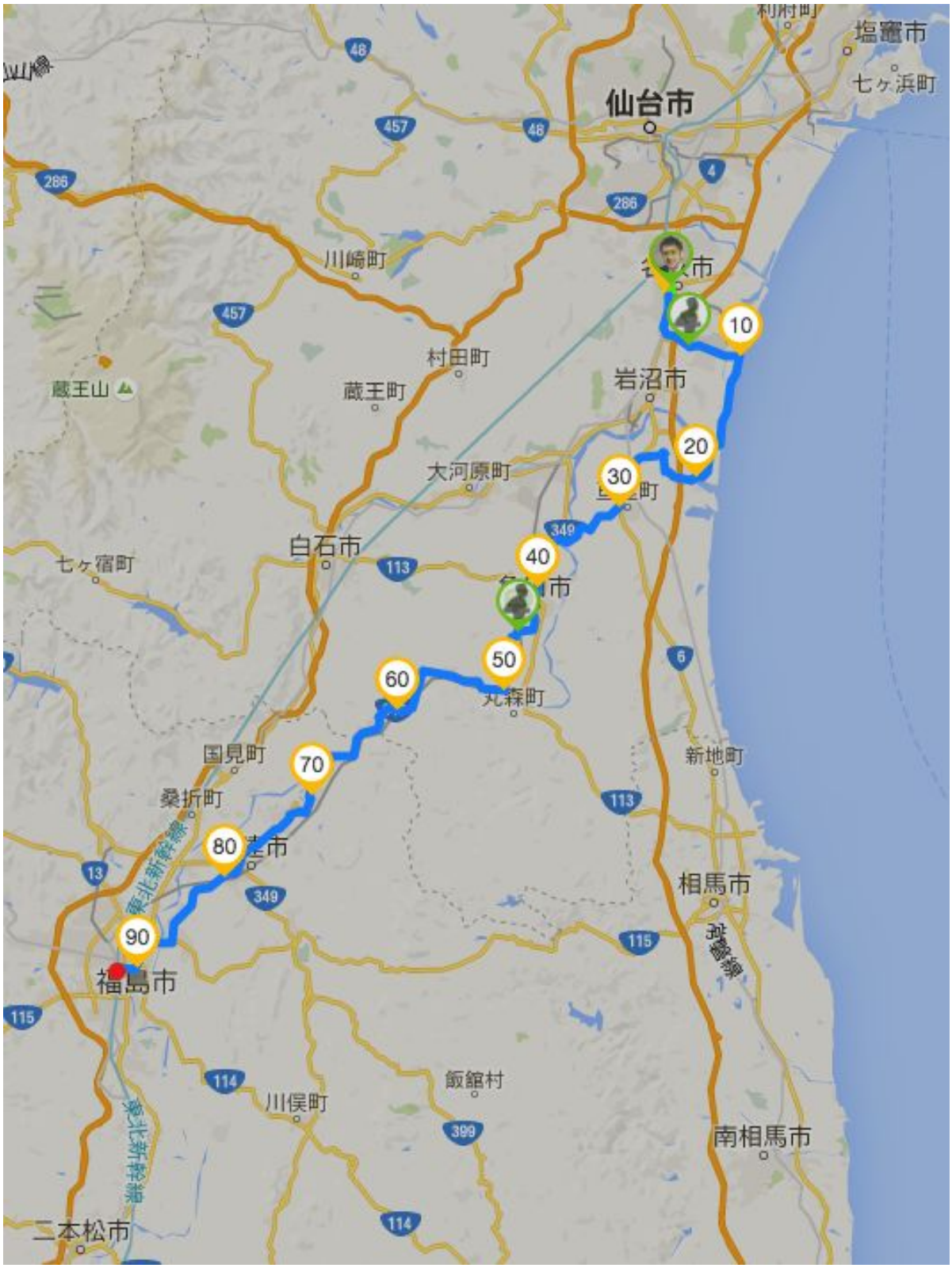
5月26日（木）	仙台～名取シャルソン	11.91km	（8人 / 10人）
5月27日（金）～28日（土）	名取～福島シャルソン	91.89km	（10人 / 13人）
5月29日（日）	福島～郡山シャルソン	44.16km	（13人 / 53人）
	合計	147.96km	

５月２６日（木）　仙台～名取



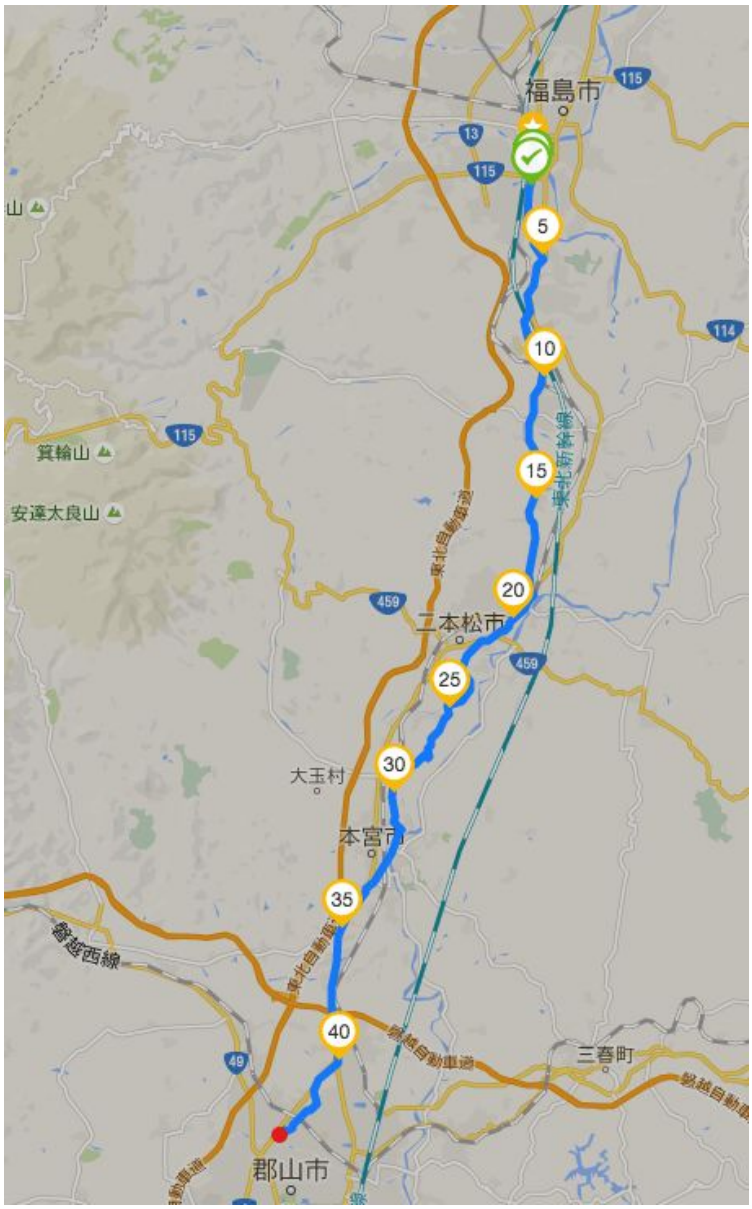
前夜祭前に軽いウォームアップラン。七ヶ浜シャルソン主催者でウルトラシャルソンにも積極的に関わってくれている成田康弘くんの実家が経営するふわとろたこ焼き「かぜの子」に立ち寄りつつ、身体を慣らした。

５月２７日（金）～２８日（土）　名取～福島



ウルトラシャルソン初のオーバーナイトステージ。熊鈴とヘッドライトを用意し、太平洋岸から山道を進み福島に到達した。

５月２９日（日）　福島～郡山



福島駅前で「ジョギング@ふくしま」というまちジョグ＆ウォークのコミュニティと出会った。郡山まで、水田や山道を通りつつ長い行程。同日開催の郡山シャルソンに合流して、郡山のまちの人々に迎えてもらった。
歩行者天国の目抜き通りをゴール地点にしていた郡山シャルソンは、参加者だけでなく道行く人にも「ゴール！」の感動を体験してもらっていた。「どうぞ、ゴールしてください」と声をかけて、たくさんの人がゴールテープを切っていた。本当に嬉しそうな表情をして小走りしていたお婆さんが印象的だった。
シャルソンが広まりつつあった２年前に、この仕組みで地域を元気にしてほしいと思い、そのことを伝えるために派生イベントとしてウルトラシャルソンという活動を開始した。各地を実際に走ってさまざまな体験をしつつ、多くの人たちとシャルソンを共有できていることを嬉しく思います。

講宴会

<u>ウルトラシャルソン５前夜祭（仙台）</u>
ゲスト：　元気と情熱株式会社・右田哲朗さん／東北電力・梅津勇さん

まだほとんど縁がなかった東北に、震災後の５月に訪れてお手伝いをしつつ、いろいろな意味で僕自身も不安を感じていたときに久しぶりに会った２人の友が、第５回ウルトラシャルソンの前夜祭に駆けつけてくれた。2011年５月の一週間の滞在のうち、彼らと飲み語ったのは３時間ぐらい。でも、知己に会うのは大事なことで、彼らの思いと実感を聞いて、突然大変な状況に陥った初対面の人たちから聞いた話を整理することができた。

その後何度も東北を訪れることになり、僕自身が開発したシャルソンという遊びを、東北復興支援に応用した。距離と時間を積み重ねて第５回。仙台で、彼らもその日以来の再会を果たし、「実を結んだ」感じがした。これからも続けていきたい。
それぞれの立場で東北の人々と関わって来た彼らの近況報告こそが、復興のかけらであると思った。再会がさらなる決意を生んだ。

カオサンゲストハウス＆パクチーハウス東京　スポンサーランチ（亘理）
スピーカー：　菊池憲一さん

津波に呑まれたあと、橋の欄干に足を挟まれて一命を取り留めた菊池憲一さんは、流れて来たパレットに乗り自宅へ帰ったという。家の様子を見に戻り、身内の無事と死を確認したあと、再びパレットに乗って近隣の人の救出に向かったそうだ。

「５年も前だから」といいながら「思い出さないようにしている」その時の様子を、僕たちに語ってくれた。寒い時期に水に浸かった場合のサバイバル術や、波が押し寄せ、引いたあとに感じたこと、考えたこと。そして、仙台空港で過ごした困難な時間のこと。死の瀬戸際まで行った方が、「生きること」について語り、終始笑顔を見せてくれた。

飯坂温泉の宴（福島）
スピーカー：　南相馬市議会議員・岡崎義典さん

2011年に開校した日本政策学校1期生だった岡崎義典さん。開校記念講義は震災で有名になった、南相馬市長の桜井市長だった。その後、政策学校メンバーと石巻市鮎川（牡鹿半島）を中心にボランティアに通う。その活動を通して『被災地のために何かしたい。』という思いを強くする。そして2012年南相馬市任期付き職員募集に応募し職員へ転職、移住する。

公務員という概念を払拭させる程の長時間労働の働きぶりで周囲を驚かせるどころか、クレームまで受けるほど。その後2014年の南相馬市議選へ出馬、当選。震災後の復興問題に放射、平成の合併のわだかまりが解けないままに、補償の差から起こる住民対立。そして元からあった少子高齢化など市議として奮闘する日々は、『被災地のために何かしたい』から地元の婚約者と出会い、自分の馬を持って南相馬市の伝統を愛し、地元の人たちと今を楽しみながら未来を語る生活に変化、謳歌している。

ジョギング@ふくしまとの出会い（福島）

郡山シャルソン関係者の方からの情報で、福島駅周辺で毎週ジョギング/ウォーキングをしているグループのことを知りました。

<< 路面電車が走っていた路を通って福島の街中でジョギング＆ウォーキング。仲間との会話や行き交う人との挨拶、景色や歴史、文化を楽しみながら「まちジョグ＆ウォーク」>>

というグループの趣旨がシャルソンに通じるものがあると思い、Facebookのイベントページ経由で連絡を取り、合流することができました。ほんの５分の出来事でしたが、次に福島市に行くときはぜひとも参加させてもらおうと、ウルトラシャルソンランナー一同は思いました。

突然の乱入をあたたかく迎えてくれたジョギング@ふくしまのみなさん、ありがとうございました。

郡山シャルソン＆ウルトラシャルソン打上げ（郡山）

郡山シャルソンは開会式に品川まさと市長がスピーチ。同市長とは2015年７月の、郡山市で３番目のコワーキングスペース開設の際にお会いし、コミュニティづくりに対する熱意と市民への信頼を感じました（シャルソン創始者の佐谷恭はこのとき、オープニングセレモニーの基調講演を仰せつかりコワーキングスペースコオリヤマ<Coko>を訪ねました）。

東日本大震災の後に少しずつ東北との縁ができた僕は、「３年経ったら忘れる」という話を聞いて「３年経ったら始める」と決めて自分ができることを考え始めました。地域おこしとランニングを組み合わせたイベントとして普及してきた「シャルソン」の活動支援をしたいと思ったのですが、シャルソンについて知らない人たちがシャルソンをやる日をただ待っていても仕方がないと思い（シャルソンはイベンターがいろいろな場所でやるのではなく、地域に関わるひとたちが自ら主催することをルールとしています）、シャルソンの発想で東北の津波被災地沿岸を訪れつつ、シャルソンの楽しさを伝えて行こうと思いました。そしてできたのが「ウルトラシャルソン」です。

ウルトラシャルソンも５回目となりました。これまで多くの地元の方々にお世話になってきました。「一緒に盛り上げてもらう」だけでなく「地域のイベントを一緒に盛り上げる」ことを考え、縁のあった郡山のコワーキングスペース「Coko」と一緒にイベントを開催することを思いつきました。郡山でシャルソンを開催してもらい、そこにウルトラシャルソンが合流。そして打上げを一緒に行って、郡山と福島、そして東北を盛り上げたいと思いました。

郡山シャルソン参加者40人に、ウルトラシャルソン関係者13人が加わり、打上げ会場は大いに盛り上がりました。コワーキングスペースを中心にさまざまな事業活動・地域活動に取り組む人たちから、震災当時の体験やその後の生活などについて意見を聞き、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

郡山シャルソンおよび第５回ウルトラシャルソンの最終ゴールは、コワーキングスペース郡山（Coko）の目の前の道路でした。郡山駅に近い中心部のなかまち夢通り（うすい通り）にあります。郡山シャルソンのみなさんだけでなく、道行く人がゴールを迎えてくれ、大変嬉しい気持ちになりました。また、繁華街にゴールテープが張られているので通りすがりの人のほとんどがそれを気にするわけですが、郡山シャルソンのスタッフが「どうぞ、ゴールしませんか？」と声をかけていて、シャルソンという単語すら聞いたことない人たちが、喜んでテープを切っていました。あるお婆さんが一度テープを切った後、カメラを持って戻って来て万歳をしてゴールテープの写真を撮っていました。そのときに見た笑顔が、郡山Wシャルソンの大成功を象徴していました。

4F
3F
コワーキングスペース コオリヤマ
こだわり山やま
cialthon
cialthon
cialthon
cialthon

撮影：写道家 朔丸さん

参加者の声

片倉充さん

もしも…と前置きをしたうえで、
一晩中、山道を登って、下って、走ってください。
と言われたら、誰だって「なぜ？」と問うだろう。
初めて「街中を再発見するシャルソン」と「ウルトラシャルソン」とが、
ドッキングする記念すべきイベントではあったけれど、
シャルソンとウルトラシャルソンは全く違う。
「覚悟の程度」ではなく、根本から違っている。
自分の知っている街の、別の顔を発見するのがシャルソンだから、
そこにあるのは、喜ぶ楽しむといった当たり前の感情の積み重ねだ。
ところがウルトラシャルソンランナーの思考は違う。
彼らには前置きもなく躊躇もない。
瞬発系とでも言うだろうか。
「時間があるから山を登ります」
という結論をあっさりと導いて、みながそれに賛同する。
「道程表」なんて破棄して、道は外れて、予定はどんどんズレていく。
世間一般の思考ともズレ、「平坦な道」をズレるほどに喜びを感じる。
GPSはあるにしても、その精度のズレがある中で、
国道を外れた彼らを推理とカンを頼りに探していくのが、
サポートカーの楽しみでもあったりする。
推理が合致して、彼らを遠くから発見するときの喜びは、
ランナー達の喜びの10分の１でも共有できたような気がする。
だから眠たくても、休みたくても、彼らが走ってる限り、
ボクだって寝てもいられない。
これだからウルトラシャルソンはヤメラレナイ。
体重が80キロもあるのに、年中走ってるランナーと同じように、
山を越え、自分を超えようとするものだっている。
ゴールテープだってない道の先を目指して、
疲れても歩くのをやめないのだ。
だから感動させられる。運転しながら涙が出てくる。
「被災地を走る」という名目もある。
でも、それはきっかけのひとつに過ぎない。
誰にも頼まれていない、誰かに期待されているわけでもない。
「なんとなく面白いから」
心の奥の柱（はしら）にするには、頼りない理由。
きっと輝いていた青春の続きを。
投げ出してしまった部活動の続きを。
忘れていた、おのれのウチにある、ハレの日を発見することを。
ウルトラシャルソンに置き換えて走るのだろうと思う。
この「おかしな人々」の「いとをかし」な瞬間を、
全て記録していくのがボクの青春だろうから、
こんなに楽しみなことはない。
いつかランナー視点でウルトラを走り切る日を夢見て。

佐谷修さん

なんで走るのでしょうね。
昔から走るのが大嫌いだった。
長距離なんてもってのほか。
それでも楽しかったというクレイジーな連中の話をきいて、つい参加しちゃった。
それで今回が３回目。
走る前は心配ばかり。
練習なんてあまりしてない。。。
ふくらはぎが。。。ひざが。。。
特に、今回は福島。
５年前の地震と原発事故。
モニタリングポスト、フレコンバック。セシウム。
内部被曝、ホットスポット。
こんな中で走っていいのか。
自分自身のこともあるけど。
それ以上に“安全”だというイメージにつながり、福島の中で不安を抱えさせられている方や体調がすぐれない方にとって、マイナスの情報発信になってしまうのでは。
そんなことを心配していた。
走り終わったからって、心配はなくならない。
問題も解決しない。
でも、走ってよかったと心から思う。
ウルトラシャルソンを走る仲間。
サポートしてくれる仲間。
郡山シャルソンの仲間。
すれ違う人たち。
人々はそれぞれ様々な課題を抱えながら生きている。
人と人がつながることで、新しいことが生まれる。
つながりを次の一歩につなげうることこそが、ウルトラシャルソンなのかもしれない。

おおうらけいじさん

佐谷さんからお声をおかけいただいた時、正直不安だった。
走ることへの不安、ではなく震災と向き合うことへの漠然とした不安、だった。
岩沼の母方の実家の建物と、祖母と叔母を津波で失った。
仙台空港のすぐそばで、被害の大きいところであった。
私はおばあちゃん子だった。
ばあ様は９０近くになっても元気だった。
タバコは吸うし、カツ丼なんか年寄りには濃いようなものも好んで食べていたし、大阪に遊びに来た時も家から急にいなくなって、みんなで騒いでいたら知らない街のはずなのに一人でパチンコ屋を探して歩いて、勝って帰ってきたり。
こんなばあ様なので、ずっと生きているような気がしていた。
死ぬことが想像できなかった。
一度、私が前職で栃木に住んでいた時、車で岩沼の実家に遊びに行ったことがある。
昼過ぎには着くよ、と連絡していたのだが渋滞していて着いたのは夕方頃。
空港道路から実家のほうへ曲がる角のところにばあ様が座っているのが見えたので、

「あれ？なんでこんなところに座ってるんだろ？」と声をかけて車に乗ってもらい、実家へ帰った。
ばあ様は久々に会う私を、とても喜んでくれた。
家に着くなり、叔父の憲さんに怒られた。
「遅れるなら連絡くらいしろ！ばあ様は道に迷わないか心配で、昼からずっとあそこに座ってたんだぞ！」
こんな、とても優しいばあ様だった。
ニュースで津波が仙台空港を襲う映像をリアルタイムに観て、真っ先にばあ様が無事か、それが心配だった。
すぐには岩沼の親戚の誰とも連絡がつかず、いろいろな手を使ってなんとか連絡を取ろうとした。
普段使ったこともないツイッターに登録し、情報を得ようとしていた。
願えば通じるもので、一家の娘の友人とつながり、そこから一気に状況がわかった。
祖母と叔母は亡くなってしまい、かろうじて残った家の２階のベッドに横たわっていること。
叔父は津波に流されたが奇跡的に、流れてきたパレットに乗って漂流して生き残ったこと。
そして祖母と叔母の亡骸が心配なので避難所には行かず、仙台空港に滞在しているということ。
息子のほうは会社の倉庫の上に逃れて無事で、避難所で友人達とたくましく過ごしている、ということ。
そして娘のほうは津波に打ち上げられ、九死に一生を得たものの、負傷につき入院中。
うちの場合、亡骸が流されずに家の中にあったのは、不幸中の幸いであった。
しかし、自衛隊などはまずは行方不明の亡骸のほうの回収を優先させていたので（この判断は間違いではないと思う）、身元がわかっているうちの亡骸の回収は後回しとなっており、叔父も毎日かけあっていたが、なかなか難しい状況だった。
いてもたってもいられなくなった我々は、私を含む親戚の中でも比較的元気な男３人で岩沼に向かい、被災した親戚の手伝い、あわよくば自分たちで祖母と叔母の亡骸を運ぼうと考えていた。
季節は春に向かい、いつまで亡骸が無事かわからない。
それに、津波で相当ダメージを受けた家の２階にいるので、いつ崩れるかもわからない。
手ぶらでいくわけにはいかない。
車に積めるだけの救援物資を積んでいこう、といろいろなところで買い物をした。
しかし、日本人のバカな国民性というか、関係のない大阪でもボトル入りの水は売り切れ、非常食の類も品薄になっていた。
とあるディスカウント酒屋に寄り、ボトル入りの水を買おうとした。
お一人様２リットルペットボトル６本入が１ケース限り、であった。
我々は３人いたので、３ケース買おうとしたが、店の人に止められた。
他の人が困るので買い占めは困る、お客様１組で１ケースだ、と。
店の人に事情を話し、我々は自分たちのために買うのではない、これから被災地へ向かうのだ。
なんだったらバールやスコップ、ブルーシート、その他食料などを満載している車を見て欲しい、と訴えた。
しかし、明らかに疑いの眼で見られ、取り合ってもらえなかった。
あまりにも腹が立ち、声を荒げる私の腕を従兄弟が引っ張り、「もういい、行こう」と店外に連れ出された。
すごく、悔しくて、悲しかった。
するとそこに若い女性がペットボトルを１ケース、持って走ってきた。
「すいません！これを持って行ってください！」

「え。。。いいんですか？そちらのご家庭が困りませんか？」
「いいんです！私の父は信太山駐屯地の自衛官でして、今被災地派遣で東北に行っているんです！」
「そうですか。。。それではせめてお代を」
「いいえ、結構です！頑張ってきてください！」
そう言って、女性は名前も告げずに走り去っていった。
私は、車の中で涙が止まらなかった。
ガソリンの問題もあった。
親戚、知り合いすべてに声をかけ、ガソリンの携行缶をひっかきあつめ、それにガソリンを満載した。
自分たちの被災地への往復はもとより、被災地でもガソリンはきっと役に立つはずだ。
しかし、どこのガソリンスタンドも、給油が10リットル、20リットルと給油制限があった。
とあるガソリンスタンドに寄った。
例によって、給油制限あり、のガソリンスタンドだった。
そこの若いにいちゃんにこっそり声をかけ、この車は見ての通り、これから被災地に向かうのだ。
ガソリンをなんとか工面してくれないか？と交渉した。
そのにいちゃんは、上司と掛け合い、こっそり裏に行って、手持ちの携行缶をすべて満杯にしてくれた。
こういう困ったときほど、人の親切が身にしみる。
しかし、良いことばかりではない。
大阪という、東北から離れた場所にいる周りの人間は危機感がなく、震災に対する無責任な発言も多い。
震災で祖母、叔母を亡くしている身、そして実際に被災地に入り、亡骸に対面し、崩れかけた実家を片付け、といろいろなことを目の当たりにしてきた私と、大阪という遠く離れた場所で、テレビだけの情報で地震を語る周りの人たちとは距離を感じ、なんとなく精神的に孤立していった。
震災の話題から逃げ、テレビは見ないようにした。
しまいには震災直後に現地入りした私を、現地の人に迷惑で無責任な行為だ、と場違いな批判をしてくる知人まで出てきて、そういう輩とは絶縁した。
いろいろなことがあり、私は震災関連の話題、情報から逃げていた。
親戚と集まっても、ほとんど震災関連の話はしなかった。
そんなことがあり、今回のウルトラシャルソンの話を佐谷さんからお誘いいただいた時、不安だった。
しかしそろそろ、震災と向き合って、いろいろなことを清算をつける時期なのかな、と思った。
今回、ウルトラシャルソンの前日に叔父の憲さんと二人きりで、震災についていろいろ深くまで話をした。
これまで聞かなかったこと、聞きたくなかったこと、いろいろな話をしたが、やはり仲良くしてもらっている叔父とはいえ、いろいろ気を使う。
皆様にお集まりいただいた際の話でも、いまいち私と叔父が踏み込んだ話を出来なかったのも、やはりそういう事情があったこと、とご理解いただけますと幸甚です。
いろいろな災害、事件があります。
震災後、これだけの年月が経ち、風化していく中でこうやって被災地を楽しく走って繋いでくれているメンバーがいる、というのはとても嬉しく思いました。
笑いが絶えないまま、海岸を走り、福島の闇を抜け、本当に楽しい日々でした。
ありがとうございました。

個人的には、ウルトラシャルソンをなめていました。
博多→東京→仙台、と一週間の出張旅の終わりにウルトラシャルソン参加、そして郡山からそのまま東京へ３日間の出張。
もう、疲労と仕事のたまり具合が半端なく、なんどとなく仕事しようとPCを開いたまま寝落ちしていました。
次は、もうちょっと仕事が落ち着いた状態で参加したら、もっと楽しめたかと思うので、頑張ります。
オーバーナイトは、しんどいけど楽しいね。
次回、楽しみにしております

小森啓安さん

ウルトラシャルソン４から参加した自分は、ウルトラシャルソン１から走り続けている仲間とはちょっとだけ心の距離を感じていた。
釜石から全行程走ってきてるってすげ～！って。
でも、そんな気持ちは本当に意味のないことだってことがわかった。
仙台空港近くでは津波がどのように押し寄せてくるか、地形がどうなっていると波がどうくるのか、説明を聞きながら走った。
心が痛くなったけど、「俺ならどうしただろう？」「子供、嫁がいたらどうしただろう？」「俺は生き延びることができただろうか？」そんなことを考えながら。
沿岸付近では延々と続く堤防の上を走った。
「どこまで続くんだよ。」「波の音は聞こえるけど、波が見えないって怖くない？」「百年後、この壁はあるのだろうか？誰か壊すのだろうか？」そんなことを考えながら。
自分は栃木という海なし県の出身で、どちらかというと山育ちなので、海に関しては何の知識も経験も持ち合わせていない。
「地震がきたら高いところに逃げろ。」なんて正直、５年前まで聞いたことがなかった。
「地震がきたら、机の下に隠れろ。」だけだった。
海の近くで暮らすための知恵は本来の地形が残していたはずなのに、その知恵を知らん顔して開発してきたのが今回の津波だったんだろうとも感じた。
被害にあった人のことを思うと残念でしかたがないが、これから未来を考えると何を残せるのだろうと。
そんな中で、津波で流されながらも生還した菊池さんのお話を伺えたのは貴重な経験だった。
運がよくガードレールに足がかかり流されなかったものの、水位があがって口ぎりぎりだった時には死を覚悟したとか、水の中の方が温かかったとか（３月の仙台はまだ寒い）、津波の後は食べるものがなかったとか。
余震が続いたときの心境を聞きたかったけど、ちっぽけな質問に思えて質問できなかった。
菊池さんが時折見せる笑顔に、「生きる」ことの素晴らしさを感じた。
たぶん東京近郊でも地震は起きるだろう。いつおきるかわからないけど。
その時には「生きる」ためにできることをやろう、そう感じずにはいられなかった。
オーバーナイトという２３時間走るってことを初めて経験したのですが、仲間と一緒だったから走り切れたし、「生きる」って本当に尊いし楽しいって思えた。
心の距離は自分が勝手に作っていたものだったし、本当に意味のないことだとわかった。
ウルトラシャルソン５の感想をまじめに書くとこんな感じ。
率直に書くと、
２３時間走って２３時間休むって、アホな時間の使い方だし、アホしかやらないことだろうし、アホが集まったウルトラシャルソン５は本当に楽しかったよ。

上田拓明さん

第1回から連続で参加させてもらっているウルトラシャルソンも第5回、「震災から3年後の今を見る」といってた第1回からはや2年、「5年後の今」となった今を見てきた。
着地点の曖昧な黙々と続くなんか不自然な沿岸部の工事。「被災した」という現実も忘れ何かただ淡々と進んでいるように思えて物悲しい気持ちになった。
一方で人の記憶は当時と少しも変わらない。
津波が襲ってくる中、パレットに乗り、自身の命が助かり、人を助けようとした菊池さんのお話はつい昨日のことのように生々しかった。仙台空港の近くにあった自宅で奥様とお母様を亡くした。「空港で缶詰になり食べ物はまんじゅうしかなかった。」と他人にここまで冗談まじりに明るく話できるまでどれくらいかかったのか。死を覚悟したという当時の体験には言葉も出なかった。
人は咄嗟にどんな行動をするのか分からない。自分ならどうなっただろう？人を助けようとまで考えるのか？
ウルトラシャルソンも5回目、回を重ねるごとに次第に走る距離、工程のクレイジーさが増している。夜通し90キロ走るとか 笑 癖になりそう。
「独特の体験」に「それぞれの挑戦」が加わった最高の時間を過ごせた。

山宮のりあきさん（Pechakucha night プレゼンテーション）
http://www.pechakucha.org/presentations/whats-ultra-cialthon

山戸惠利加さん

ウルトラシャルソンは今回で5回目。
震災から3年半が経とうとしていた2014年8月、釜石からスタートして以来、前回のゴール地点の仙台に至るまで、たくさんの人と共に進んできました。
今回は前回ゴール地点・仙台を出発して、名取、福島、郡山へ。
<憲さんのお話>
2日目オーバーナイトランの日、参加者の大浦さんのお母さん方の実家があった、仙台空港からほど近い岩沼では、大浦さんが走りながら震災当時のことを説明してくれました。大浦さんにとっても思い出の詰まったお家は、基礎の部分を残して消え去ってしまっていました。
当時そのお家では、今回お話を伺った、大浦さんのおじさんである「憲さん」、奥さん、大浦さんのおばあちゃん、憲さんの息子さんと娘さんが暮らしていましたが、津波のせいで奥さんとおばあちゃんが亡くなりました。
津波に襲われた時のお話には、それはこれまでに誰からも聞くことのなかった衝撃的な言葉が含まれていました。パレットにつかまったり、泳いだり、その状況を切り抜けようとする中、「家族のことは全く頭に浮かばなかった」というのです。「家族のことが頭に浮かばない」、その状況がどれほどのものなのか、想像しようとしてもできませんでした。
時折、笑っていいのかどうなのかという冗談を交えながら当時のことを話してくださった憲さん（避難先の仙台空港でお土産物の饅頭を食べ過ぎて、「津波では死ななかったけど糖尿で死にそうだった」とか）。「普段は思い出さないようにしているのだけど」、それにも関わら

ず、辛い記憶をたどり、私たちのために話してくださったことを、やはり誰かに伝えなければならないと思うのです。
とにかく高いところへ逃げろ。
靴は水の中で重くなるから脱げ。
気温が低いときは水の中の方が温かい。
<ついに福島へ>
第1回、岩手県から宮城県に入り、今回まで宮城県をじっくり南下してきましたが、今回でついに福島県に入りました。積み上げられた汚染土、放射線物質を測定する装置、そういうものが目に飛び込んでくるようになりました。
原発からの距離によって、同じ町の中でも補償による“格差”が生じ、それに対する不公平感が住民同士の間に軋轢を生んでいるというお話が、福島でお話を伺った南相馬市の議員、岡崎さん（栃木県出身。震災を機に南相馬に移住し、市の職員、その後議員になった方）の講話の中でもありました。原発の問題自体だけでも甚大なダメージなのに、その後の対応によって人間関係にさえヒビが入ってしまっている現実に、問題が途方もなく大きく複雑であるということがあらわれているように思います。「これがベスト」という選択などない中で何事かを決断していかなければならない状況の連続なのだろうと。
５年経ったからといって、福島では何も終わっていない。終わっていないことばかりだと突き付けられました。
＜飯坂温泉＞
福井市では飯坂温泉の「ほりえや旅館」でお世話になりました。創業明治十五年だそうで、たまらない趣のある古さに魅せられました。料理も、若女将の手作りの桃の実ゼリーがあったりと、温かみの溢れるものでした。
旅館からほど近くにある昔ながらのかき氷屋さん（本職は海苔屋さん）によると、震災当時、飯坂温泉の旅館にも除染作業員の方が多く泊まっていたそうで、「滞在中はずっと部屋を閉め切った状態だった」と。現在も震災以前ほどの観光客は帰ってきていないとのことでした。
飯坂温泉街は、最も古い鯖湖湯をはじめとする外湯が９箇所あり、すべて200円～300円で入ることができます。どこか懐かしい近所のおじさんと子供達の関係、ゆったりと流れる時間、まるで昭和にタイムスリップしたような街並みの中、オーバーナイトで疲れた体が癒されていきました。
＜やっぱりやめられないウルトラシャルソン＞
今回はウルトラシャルソン史上初めてオーバーナイトステージがあり、23時間移動し続けてその総移動距離は91kmにもなって、翌日は45kmをそこそこのスピードで走る行程でした。ウルトラシャルソン的な移動距離には慣れてきたものの、私の体力と走力からするとやっぱりきつかったです。
でも、夜の山越えでヘッドライトを使って幽霊ごっこしたり、突然スキップし始めたり踊りだしたり、夜通し走るという頭のおかしいミッションを前にして、大人たちはまるで新しいゲームを手に入れた子供のように楽しんでいました。
時間があれば遠回りするし、山があれば登る。ゴールへ続く道はいくつもあって、その時々で一番楽しそうな道を選び、全身の毛穴から思いきり刺激を受けながら進んでいくのがウルトラシャルソンランナー。そういう人たちと一緒だから、「きついなぁ疲れたなぁ」と思っても、惜しくてやめられないのです。
（どんなに疲れても、サポートカードライバー兼カメラマン兼マッサージ師の片倉和尚にマッサージしてもらえるとまた走り出せるし！）
ウルトラシャルソンを通しての次なる出会い、挑戦にもうわくわくしています。

田上百合子さん

昨年は仕事の関係で参加出来なかったウルトラシャルソンに久しぶりの参戦。
2014年1回目の感想は3日間で120㌔を走破する『愛すべきバカ者達』
今回5回目の感想は『進化するチョ～愛すべきバカ者達』だ。
全然走れないし、日本一地図読めないけど、酒は人より飲めるから『8時間走って8時間呑んで8時間寝る。』ウルトラシャルソンの参加資格あるよね、って毎回サポートカーの助手席参加。
そして、今この時にチャレンジするメンバーを目の当たりにする。
しかも今回、仙台～名取～福島～郡山を目指す『進化するチョ～バカ者達』は、91㌔のオーバーナイトまで遣っちゃうという。
その若干クレージーなメンバーと毎回その土地で被災の体験談や、復興に尽力している方々のお話を伺う。
311の後、牡鹿半島でボランティアをしていた頃からウルトラシャルソンで訪れた各地で何度も耳にした言葉。
『もしもの時は自分の命を守る事が優先、自分の命があるから人も助けられる。』
それは『いまを生きる、だから道は開ける。』と私には聞こえる。
そして毎回、被災地の復興はその土地の方々のそんな力強い『いまを生きる力』が支えているのだ、と思う。
亘理で津波をパレットに乗って生き延びた大浦さんの叔父様、憲さんのお話。
『家の中で津波が渦を巻いたんじゃないかな、犬や猫まで一緒に折り重なっていたよ。』
奥様とお母様を亡くして、振り返る言葉は胸に沁みる。5年前のこと、客観的語ること、明るく語ることで、万感の思いを受け止めている、その言葉は重い。
長かった宮城県を抜けて福島に入ってのオーバーナイト攻略後の飯坂温泉での講宴会。
南相馬から駆けつけてくれた友人岡崎さんとの久々の対面からの車座での座談会へ。
政策学校の同期で一緒に牡鹿半島でボランティアをしていた岡崎さん、被災地で何か出来ることを探して、南相馬市の任期付き職員に、そして一昨年南相馬市議へ。
平成の大合併から被災地の中でも放射能問題を抱えての福島、南相馬市は合併のしこりのままに放射能と補償問題が顕在化し、元々の高齢化も含めて問題が単純では無いが、
『被災後初めて田植えの許可が下りて、明日農業高校で田植えをするんだ。』と笑顔の岡崎さん。
いま出来ることを選んで続けて、「被災地で何かできることはないか」から「馬もちゃんと付き合うと猫になるよ。」って南相馬を謳歌する笑顔の言葉。
いまその瞬間にコミットし続けての、その言葉なんだね、久ぶりの再会に感動でした。。
朝の9時にスタートしてゴール予定は翌朝8時の91㌔オーバーナイトとか、『45キロランは楽勝ですね～』とか、普通じゃないコメントが飛び交うウルトラシャルソン。
グーグル先生に翻弄されて道に迷ったり、
これから30㌔の山越えなのにビールはメガジョッキだったり、
深夜の山道で狐に出会ったり、
見積りしながら走るランナーが現れたり、
闇の中にマッサージ師が現れたり、
91㌔じゃ物足りなくて100㌔越えのランナーが現れたり、
走ったメンバーも
サポートメンバーも
現地でお話を伺いご縁を頂いた方々も
みんな、いまこの時間に最大限コミットする。
次は何があるかな、、何かが起こりそうな予感が楽しいのがウルトラシャルソンの魅力だな。

実施概要

名称
　第５回ウルトラシャルソン（Ultra Cialthon 2016 Spring）

開催期間
　2016 年５月２６日（木）～２９ 日（日）

延べ参加人数
　76人

イベントページ
　https://www.facebook.com/events/1695921770674020/

主催
　ウルトラシャルソン実行委員会
　ご当地シャルソン協会

スポンサー
　カオサンゲストハウスグループ（有限会社万両）
　パクチーハウス東京（株式会社旅と平和）
　Happy Printers（堀江織物株式会社）
　Cheero（ティ・アール・エイ株式会社）

協力
　元気と情熱株式会社
　極楽湯 名取店
　農家レストラン旬菜館
　養老乃瀧 角田店
　極楽湯 福島店
　ほりえや旅館
　一二三食堂
　和楽カフェ
　コワーキングスペースコオリヤマ（Coko）
　プチホテルローズガーデン

　仙台市、名取市、岩沼市、亘理町、角田市、丸森町、伊達市、福島市、二本松市、本宮市、郡山市のみなさん